



変革の時期

第21代校長 加藤 巡 一

兵庫県立芦屋高等学校が創立70周年を迎えられ、眞に喜ばしく感慨も一入であります。

今でも阪神高速道路3号線を通る時、一瞬だけ見える校舎はとても懐かしく、その度に様々なことが思い起こされます。私は教員としての4年間と定年退職までの3年間を本校で勤めました。特に最後の3年間は教師人生の集大成として、あれもやりたいこれもやりたいと思い続けた日々でしたから充実していましたし、忙しくもありました。教頭先生をはじめ全教職員の方々、更にPTAの役員の方々、同窓会の役員の方々には私の意をよく汲んでいただき、多大なるご厚意とご支援をいただきました。心より感謝致します。思い出はまさに溢れるごとくであります。ここでは三つのことについて触れたいと思います。

その一つは修学旅行を海外にしたことです。当時、高等学校の修学旅行はスキー訓練が主流でした。ところがスキー訓練は中学の時に経験したという生徒も多く、新鮮味に欠けていました。そこで海外への修学旅行を検討して、地域としてはマレーシアを選び、その目的は観光ではなく人々との交流を中心にしました。グループに分かれての工科大学学生による市内案内、そして中等学校への訪問と交流（本校弓道部の演技披露、男子サッカーや女子バスケの試合など）、さらにホームビジットなどの内容でした。初めてのことであり不安も多く、様々なトラブルもありましたが、それとは比較にならない収穫があったように思います。一言で言えば、自然の豊かな風土の中で、人々の優しい笑顔に包まれた日々でした。そこで過ごした経験は今も卒業生の心の支えの一つとなっているのに違いないと思っています。

二つ目は一番嬉しかったことです。それは全校集会での訓話または式辞をほぼ全員の生徒諸君が静かに聞いてくれたことです。そして、私の話で励まされたという手紙や感想文を何人かの生徒からもったり、進路を決める決心がついたと校長室まで話しに来てくれる生徒もいました。自治会の生徒も時々話しに来てくれました。校長などは外部との関係調整に追われて、生徒に直に働きかけられることは殆んど無いのではと考えていたのに、その度に反響があって、それなりのやりがいを感じることができました。

三つ目は単位制への改編です。自分への批判の中にこそ自分を変えていく大きなヒントがあると言いますが、このことは学校でも同じだと思います。責任者として学校の批判とか悪い評判は聞きたくないものですが、私は中学校を訪問した場合でも、市教委主催の会議でも、敢えて色々な人に聞かせていただくようお願いしました。すると普段は見えていない生徒の動きや、これで良しとしていた学校経営に対して様々な意見が聞けて、それが改善のための大きなヒントとなり、教職員の皆さんに分かりやすくお伝えできる良い材料になりました。その延長で単位制への改編を進めました。今日でも同じ思いですが、単位制には大きな可能性が秘められていると感じていました。県立西宮高校も来年度から単位制になります。今後もその大きな可能性を信じて、本校も前向きに取り組んで素晴らしい成果を上げて欲しいと念じています。

退職後、神戸松蔭女子学院大学で教鞭をとって6年目を迎えますが、講義や実験やゼミで、教師の原点に返ったような毎日です。「暮年壮心已まず」を目標として頑張っています。

最後に本校の益々の発展と関係者の皆様のご健勝を祈念いたします。